

2017 年度世界展開力強化事業 中南米との大学間交流プログラム（短期留学）帰国報告書

国際食料情報学部・食料環境経済学科・3年 原田帆菜

1. 目的

わたしが本プログラムに参加した目的は、三つある。

一つ目の目的は、実際にブラジルの文化を体験することである。今までは授業や文献などかですらブラジルのことについて学ぶことが出来なかったが、実際にブラジルを訪れ体験することで、ブラジルがどんなところであるのかをより深く知りたいと思ったためである。

二つ目の目的は、ブラジルの農業について学ぶことである。中でも、わたしは経済性と守りつつも環境を守るといわれているアグロフォレストリーについて興味があり、トメアスでは。アグロフォレストリーを実際に見たい、また、どういった点がアグロフォレストリーの課題であるのかを学びたいと思っていた。

三つ目の目的は教育といった問題から、ブラジルについて、またブラジルの農業について考えることである。現在私は教育課程を履修している。そのため、ブラジルにはどういった教育の問題があるのか、そしてそれらの教育の問題が同農業に関係しているのか興味があった。

これらの目的達成のため、本プログラムに参加し、現地での農業研修・語学研修を行った。

2. 現地での活動内容

三週間のプログラムのうち、主にサンパウロと、ブラジル北部に位置するパラ州にあるベレンとトメアスで活動を行った。

サンパウロでは、ブラジルに到着初日に農大会館に滞在した。会館では、農大のOBの方々が迎えてくれ、様々なブラジルの経済の状況であったり、日本との違い、昔の農大などについてまだブラジルについたばかりの私たちに様々なことを教えてくださった。日本とは遠く離れたブラジルの地に、このような大学と関連した施設があり、沢山の農大のOBの方々がいるのだということを知り、農大とブラジルの結びつきをより深く感じた。

翌日、サンパウロ中心部から車で、ピラシカバにある農大の協定校のサンパウロ大学農学部キャンパスである ESALQ に移動した。ESALQ はとても大きな敷地を持つキャンパスである。大学の敷地内には様々な植物が植えられており、ブラジルの国名の由来にもなったブラジルの木もあった。また、学内を流れる川には野生のカピバラが生息しているなど、自然豊かなキャンパスである。

サンパウロ大学では、ポルトガル語の講義や農場見学、研究室の見学を行った。中

でも興味深かったものは CEPEA の活動である。CEPEA では毎日電話で価格の聞き取り調査を農家や企業に行い、インターネット上やマガジンで市場価格のデータや分析を公開している。また、ブラジルの農業部門の GDP の算出などを行ってもいる機関である。CEPEA の活動には多くの企業が協賛しており、規模も大きく、レベルの高い活動を行っている。わたしは農業経済学の専攻であるため、このような市場価格形成に関するデータを集める機関というもの是非常に興味深いものであった。また、以前に CEPEA の調査によって作られたデータを使用したこともあり、このようにデータが作られているのだと知ることが出来た。また、CEPEA のほかにも、農業経済学の分野である、情報をもとに輸送などの様々な経済予測を行う ESALQ-log といった機関も見学をすることができた。今回これらの農業経済学分野の機関を見学できたことは、非常に良い経験になったとともに、自身にとって大きな刺激となった。

サンパウロ大学では、学生寮にもお邪魔して、実際の ESALQ の学生がどのように生活しているのか知る機会があった。ESALQ の学生自ら焼いたシュラスコをふるまってもらうとともに、ESALQ でのしきたりや文化、普段の学生生活など、様々なことを話し、とても楽しい時間だった。現地の学生と話すことで、大学の講義や見学からは知りえなかった新たな発見があった。

また、ESALQ では滞在中、日本文化を知ってもらうため ESALQ の学生に向けて浴衣の着付けや、空手、折り紙などのワークショップを行った。

トメアスでは、アマゾニア州立大学での大学見学や語学研修のほかに、CAMTA とよばれる農協の施設やジュース工場の見学、そして、5 日間のファームステイを行った。トメアスは戦前から戦後にかけて、多くの日本人が開拓のため移住しており、現在でも多くの日系人が生活している。そのため、レストランやスーパーなどにも日本食や日本食の食材が多くあった。

戦後、トメアスではコショウ価格の高騰により、コショウの栽培が盛んであった。しかし、病害の発生により、トメアスのコショウ栽培は大きな被害を受け、衰退していった。そうした過去の反省から、現在のトメアスでは様々な作物を植え、森を作る農業とされるアグロフォレストリーが行われている。わたしが今回ファームステイでお世話になった坂口さんの農場ではカカオやアセロラ、アサイー、コーヒーなど 80 種類以上の作物が植えられており、外の道路から農場の中に入っても、ここが農場だと言われなければわからない程様々な木々が生い茂っていた。また、収穫した農産物の加工も行っており、モリンガは乾燥させてモリンガ茶に、コーヒー豆は焙煎するなどして販売も行っている。

坂口さんの父親にあたる故坂口昇さんは、アマゾンの先住民の暮らしをヒントにトメアスの地で「森と共生する農業」としてアグロフォレストリーを始めたのだという。一つの作物でも、実を多くつける年とそうでない年がある。また、雨の時季や量によってもその年の収量は変化する。アグロフォレストリーでは様々な作物を栽培す

ることにより、単作での不作時のような事態を回避することができる。その一方で、以前の「コショウ景気」の際のように一度に大きな利益を得ることは難しい。だが、坂口さんは、経済的な利益を追い求めすぎない、「ほどほどさ」が重要であり、環境に負荷をかけ、博打のような単作を行うよりも、持続的に、安定的に農業を行うことがとても大切なのだとおっしゃっていた。今回坂口さんがアグロフォレストリーを行う上で大変な点として挙げていたのは、広い農場に様々な作物が植えられているため収穫の際に手間がかかること、どこに何の植物があるかの把握が難しいということだ。作物のある場所を労働者がきっちりと把握していないと、収穫のタイミングを逃してしまうことがあるそうだ。また、収穫の時期が同じ種類でも木によって1、2週間ずれることがあるため、収穫時期の把握が難しいとおっしゃっていた。

トメアスではファームステイのほかに、CAMTA と呼ばれる農協を見学した。CAMTA では各農家から収穫されたカカオやフルーツ、ピメンタを集め、加工を行っている。今回は、ジュース工場やカカオやピメンタの集荷場、アンジローバなどの搾油の現場を見学させていただいた。CAMTA のカカオは明治製菓が買い付けており、チョコレートとなって日本のスーパーマーケットやコンビニに並んでいる。また、アサイーもパウチ加工され、日本に輸出されている。日本から遠く離れたトメアスの地で、日本で販売されている商品の生産の現場を見ることができたのは非常に良い機会であった。

3. 自己評価

実際に現地で体験することで、文献などからはわからなかった様々な物事や習慣、課題を知ることができた。中でも、トメアスの坂口さんの農場では、労働者が地図を読むことができないため、作物の位置を地図ではなく、口で教えているといったように、教育の問題が、農業とも関係しているのだと分かったことは大きな勉強になった。ただ、農業について問題があるのではなく、その問題には様々な社会的要因が関わり合い、形成されているのだということを知ることができたのは今回の研修では学ぶことが出来た。

今回の研修における反省点としては、自身の勉強不足があげられる。サンパウロ州立大学での講義では、わたしは農業経済が専攻であるため、生物学的な内容についていけない点はいくつかあった。また、ポルトガル語を研修前に日本で勉強をしていたが、不十分であり、ベレンでは思うように伝えたいことが伝わらないもどかしさを味わった。もっと不自由なくポルトガル語を話すことが出来たのなら、さらに多くの知識を得ることができ、コミュニケーションの幅も広がったであろう。今回の研修での反省を生かして、これからも農業やポルトガル語について勉強していきたいと思う。

4. 今後の取組み

今回の研修では、日本とは遠く距離が離れているが、今でも密接な関係であるブラジルについて深く知ることができた。また、ブラジルにおける農大のつながりについても知ることができた。研修中や帰国してから、スーパーマーケットなどで注意深く商品などを見てみると、ブラジルにも様々な日本企業の商品があること、また、自身の身の

回りには、ブラジルと関わりがあるものがたくさんあるということに気づかされた。今回帰国してから新たに発見した商品なども多かったため、今後は身の回りに溢れているであろうブラジルとの関係性についてもっと着目して、生活していきたい。

今回のプログラムでは語学研修のみならず、農業研修を行ったため、ただ旅行や語学留学に行くのとは違った多くの経験をすることができた。実際に農場を見学したり、ファームステイをすることで、日本でインターネットや文献、授業では教わらないようなことまでも現地で実際に体験し、身をもって学ぶことが出来、非常に貴重な経験であったと思う。今回のブラジル研修によって得た経験、知識や物事についての考え方は今回限りにとどまらず、自身の将来に活かしていくことができるようにしていきたい。

5. プログラムに対する要望

本プログラムに対する要望としては、サンパウロ大学やトメアスでの活動にあたり、事前に詳細なスケジュールを学生に知らせてほしいという点だ。今回、わたしは自身の専門外の分野の内容について、説明をしてもらった際に十分に理解ができなかったことがあった。また、内容を理解するというだけでなくに精一杯で、踏み込んだ質問などができないこともあった。これはもちろん自身の勉強不足といった面もあるだろうが、事前にどのような研究室や設備に行くのか知っていれば前もってその分野について学習し、知識を持った状況で講義や説明を受けることができたのではないかと思う。今後、研修を行うにあたってそういった事前準備をすることで研修がよりよく、有意義なものとなるのではないだろうか。

また、日系でない農家を見る機会が少ないため、非日系の農家のもとで話を聞いたり、学ぶ機会があると、日系の農家と非日系の農家の考え方の違いなどを学ぶことができ、より研修が有意義なものになるのではないかと思う。

最後に、本プログラムの開催にあたりましてご尽力くださいました皆様のおかげで、非常に充実した研修を終えることができました。関係者の皆様、本当にありがとうございました。



・お世話になった坂口さんご一家



・坂口さんの農場のアグロフォレストリー